

隋代墓葬美術の一様相

田林 啓（白鶴美術館）

近年中国では墓葬、仏教美術の発掘が相次いで行われ、目覚ましい成果があげられている。僅か 37 年の命脈に終わった隋朝の遺物に関しても例外ではない。

約 300 年ぶりに中国を統一した隋朝は、大規模な土木事業を行い、文化面にも多くの財貨を傾けた。仏教美術を例にあげると、敦煌莫高窟では、隋代に開鑿された石窟がおよそ 80 窟にもこのぼり、前代に比して飛躍的に窟数が増加した。しかし、中原の絵画の様相を知るために必要とされる墓葬美術の出土例はごく僅かであった。そのような中、陝西省潼関税村において大規模な壁画墓（潼関税村墓と略称）の存在が知られるに至った。

隋よりも一代前の北斉と北周の時代の墓葬美術では、皇室のものや西域人たるソグド人のものまでも発掘されている。娄叡墓、磁県湾漳壁画墓（以上北斉墓）、安伽墓、史君墓（以上北周墓）などがその代表である。北斉墓壁画では、伝統的な神獣や天象図等のモチーフを描きながらも、人物や動物の群像表現、躍動感の描写に新たな境地を開いており、また北周のソグド人墓の石製遺物では、拝火教の祭司などの西域由来の図像が表される。一方、隋潼関税村墓では、墓道に北斉墓のような群像表現から成る儀仗図、墓室に天象図が表され、また石刻画を伴う石棺の存在も確認されている。特に石棺に刻される画像は注目に値し、本体左右の側板に龍車と虎車、前後板にそれぞれ朱雀と玄武を描き、また蓋には連珠亀甲繫文の枠を設けてその中に計 57 体にも及ぶ各種の神獣を表す。男女の天人を乗せて、周囲に仙人や瑞獣を侍らせて飛翔する龍（虎）車の様子は、北魏の都洛陽出土の石棺に描かれる騎龍、騎虎仙人図にも通じるが、龍車は古くは伝顧愷之「洛神賦図」（東晋）や後漢画像石に表される。神獣が牽く車の図像はこれまで莫高窟や麦積山石窟の北朝、隋窟に遺例が認められたが、管見の限りでは中原ではこの時期の例は他に知られない。また石棺蓋の各種神獣図には、鳳凰や龍に交じって、ソグド美術中の祭司のように頭部が胡人で身体が鳥身の図像や羊頭鳥身の神獣が描写される。総じて、当墓の美術品からは、前代までに現れる要素を基盤として、中国に伝統的な図像と西域の図像の融合が最高潮に達している様子を見て取ることができる。当墓は、文帝の長子である楊勇の墓ではないかとも推測されており、その美術品は隋代美術の一つの基準作ともなり得る。

隋代には、西域人の血を引く何稠が技芸官として活躍し、緑磁による瑠璃模品やペルシャ錦の製作に成功したとされる。また、中国に伝統的なモチーフを用いながらも銀貼による鏡が既に当代に作られていた可能性もある（白鶴美術館蔵銀貼鏡）。南北朝時代までの諸要素を総合して、自前の文化として表出しようとする態度は統一王朝たる隋ならではのもので、本発表では潼関税村墓壁画を主な対象としてその具体的様相を示すことを目的とする。